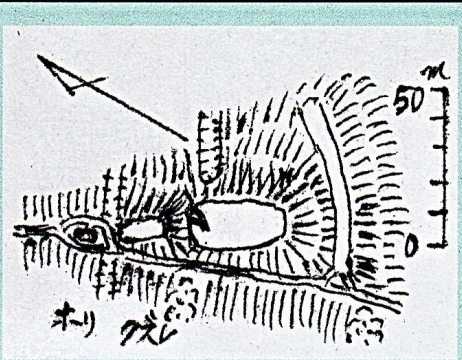
もっと知りたい ふるさと ㉞

佐野山城跡とかつての攻防

佐野山城は、佐野西の高雄山から東方に下った、剣の刃渡り状の尾根の末端部にある中世の山城である。所在の地名は佐野山の字仏供殿である。

城は仏・供・殿　縄張り

西は滝の沢、南側は佐野川、東は尻垂沢の三川や竪堀、急崖に囲まれた自然要害の城である。本郭の標高は六八〇メートル、佐野川からの比高一〇〇メートルで、広さは南北三〇メートル、東西一七メートルの不整長方形である。北遇に上の郭と結ぶ馬・踏がある。郭上部は削平せず尾根のまま利用し、北西に堀切を設けて地山を断ち切り、後の小山を村の古老は旗塚と称していた。



佐野山城跡図

また、本郭の西南部に鉤の手の石積（根石）が見られ、西南共に五メートル程の長さである。南急斜面下の郭は七メートルと幅は狭いが、東西六〇メートルと長大である。断崖の車橋から続く南麓の大手登路の左右を始め大小、数多くの曲輪がある。

なお、水の手は滝の沢より容易に得られ、館は東北の尾根を越えた古家沢畔にあった。

攻防等の略史

築城年代など判然としないが、桑原氏が築いたものであろう。永享十二年（一四四〇）の「結城合戦」で、陣中警護や矢倉番を定めた『結城陣番帳』の廿五番に、「桑原殿　同名対島守殿　横田殿等」とあり、守護の小笠原氏に属し参戦していたことがわかる。

また、『諏訪御符礼之古書』によれば、康正三年（一四五七）から先の桑原対島守幸光が、諏訪上社の祭五月会の頭役を数回勤仕し、長享三年には桑原政光に替わり奉仕していた。

これによって桑原氏が当地で、なお、隣郷の塩崎に進出した桑原氏の一族もいた。

文明十二年（一四八〇）の諏訪上社の祭、花会頭役に四宮庄が充てられ、その頭役人は桑原六郎次郎貞光で、更に同十七年の花会に塩崎貞光と改姓して勤仕している。そして、戦国時代には退転した桑原氏に代わり活躍している。

天文二十二年（一五五三）四月、武田氏は深志、筑北から村上の葛尾城の攻略にあたった。塩崎六郎次郎は屋代氏と共に佐野山城に拠るが、『高白斎記』には「四月六日、屋代方塩崎方致同心、桑原ノ地無最ノ由御注進」と、記している。武田方の来属に　石川氏らが相次いで降り、背かれた葛尾城は九日自落する。

就佐野山在城、其方知行北大塩廿三人之前、押立公事令免許者也　仍如件

天文廿四年
四月廿五日　信玄
内田監物　『歴代古案』

当地を手中にし、内田監物を佐野山の城将に据えたことは、西山への押さえと川中島進出の前線基地として重要視したものであった。また、永禄三年には海津の城将に転じた。この「就海津在城、其方知行北大塩（下略『文書』）は、海津城の名の確実な初見であるといわれている。

後に武田氏が滅び、上杉景勝領となった天正十一年（一五八三）四月、海津城の副将屋代秀正は家康方へ内通し、加担した塩崎氏は佐野山城へ立て籠もった。そして、『直江兼続書状』にあるように、

逆徒居城荒砥・佐野山両地不経五三日自落、無行方為躰候、（上・下略）

衆寡敵せず荒砥城の屋代衆同様に、麻績方面へ逃れている。

重要視された佐野山城

地方侍にとっては、降るか逃げるか他に手段はなく、川中島決戦から、筑北の争奪戦へと展開していった。ともあれ、山城は多いが、至って簡単素朴な山城であるが、攻防など諸史料にその名を見られるのも珍しい。やがて塩崎氏は帰農し、上方備えに平城の稲荷山城が築かれ、佐野山城は廃されたものと思われる。

堀内暉巳